

さらに、多くの人々に淵澤能恵の生涯と功績を再認識させて、郷土の偉人として永遠に位置づけることに寄与することでありましょう。

日本が大韓帝国の支配権をめぐる日露戦争に勝利し、実質的な日本の韓国支配が色濃くなった1905年5月、淵澤能恵は55歳で、韓国に渡る。

渡韓後、韓国皇室の高宗皇帝の後妻である厳皇貴妃の支援を受け、貴族の李貞淑と共に、「明信女学校」の創立に貢献した。そして、没するまでの30年間で、唯々近代化に立ち遅れた韓国の、それも朝鮮の近代女子教育のために奉職し、敬虔なクリスチャンとして人生を貫き通す。淵澤能恵の没後3年にあたる1939年に、「明信女学校」、後の「淑明高等女学校」が、淵澤能恵の生前の念願であった「淑明女子専門学校」として開学する。戦後の1948年には、この「淑明女子専門学校」が四年制の「淑明女子大学校」に昇格する。今日まで「淑明女子大学校」は、韓国屈指の名門女子大学として存続し、多くの優れた女性を韓国社会へと送り出す。

このような淵澤能恵の功績は、これまで日韓両国でほとんど知られてこなかった。戦前においては「朝鮮女子教育の母」、また、「内鮮融和の母」と謳われた淵澤能恵の人生と足跡を、本フォーラムで迎ると共に、ここではこれまで紹介された「淵澤能恵」に関する主な出版物他の資料をまとめる。

* 淑明学園の沿革

- 1906年 「明新女学校」を創立(4年制)
- 1908年 「明新高等女学校」に改称(本科3年制、予科2年制)
- 1909年 「淑明高等女学校」に改称
- 1911年 第1次朝鮮教育令第229号により「淑明女子普通学校(予科4年制)」と「淑明女子高等普通学校(3年以内)」に改編。
- 1936年 「淑明女子専門学校創立準備委員会」発足
- 1938年 「淑明高等女学校」に改称
- 1939年 「淑明女子専門学校」を創立
- 1946年 「淑明女子高等普通学校」が「淑明女子中学校」に改編(6年制)
- 1948年 「淑明女子専門学校」が「淑明女子大学校」に昇格
- 1951年 「淑明女子中学校」が「淑明女子中学校(3年制)」と「淑明女子高等学校(3年制)」に分離改編

* 淵澤能恵に関する主要出版物

- ①報告書「淵澤能恵 ―韓国女子教育の礎を築いた人―」石鳥谷花の会編集委員会著、石鳥谷花の会、2002年7月20日、総26頁
- ②『淵澤能恵の生涯 ―海を越えた明治の女性―』村上淑子著、原書房、2005年12月2日、総173頁
- ③韓国語翻訳本『후치자와 노예의 생애(淵澤能恵の生涯)』村上淑子著、姜奉植訳、현학사(ヒョンハク社)、2009年6月5日、総211頁
- ④会報「淵澤能恵通信」淵澤能恵を顕彰する会

* 淵澤能恵に関する主要報道

- ①「東北女人三代 淵澤能恵」河北新報、1968年4月4日
- ②テレビ放送「能恵は55歳で海峡を渡った」(30分)、テレビ岩手、2003年5月3日放送
- ③「教育開いた淵澤能恵」岩手日報、2005年1月30日
- ④「淵澤能恵の伝記翻訳」岩手日報、2009年7月4日
- ⑤「淵澤能恵の顕彰活動」岩手日報、2009年9月3日
- ⑥『淵澤能恵の生涯』韓国語翻訳本の紹介記事『지방의 국제화(地方の国際化)』、2009年10月号

2. 淵澤能恵と明新女学校の創立

淵澤能恵は、若い時、福澤諭吉著の『西洋事情』や『学問のすゝめ』などを熟読していたと言われ、西洋への関心を抱き、また啓蒙思想の影響を受けていたようである。淵澤能恵は、29歳(1879年)の時にアメリカに渡って苦学をしながらキリスト教に入信し、洗礼を受けてクリスチャンになった。32歳の時、養母の要請で帰国をするが、間もなく同志社女学校に入学して新島襄の薫陶を受けた。35歳の時、同志社女学校を中途退学し、東洋英和女学校で教鞭をとり始めて以来、数ヶ所の女学校で学監や教師をしていた。

1905年5月、55歳の淵澤能恵は、岡部長職夫人抵子の誘いで韓国に渡り、韓国皇室が設立に乗り出した近代女子学校の創立に大きく貢献することになった。1906年1月、韓国皇室の厳皇貴妃を総裁とする日韓婦人会が結成され、同年5月、明新女学校が開学されるが、日韓婦人会と明新女学校との間には密接な関係があったと見られる。日韓婦人会の総裁は厳皇貴妃で、会長は貴族の李貞淑、総務は淵澤能恵であったが、この3人は、明新女学校の創立にあたり、厳皇貴妃は学校の敷地の提供や財政上の支援を行っており、李貞淑は校長に、淵澤能恵は学監に就任していることからその深い関係が窺える。

厳皇貴妃は、アメリカの宣教師たちが先駆けて設立した、韓国最初の近代の男子校と女子校と言われる培材学堂(1885年設立)と梨花学堂(1886年設立)の他、外国人による学校設立に刺激を受け、近代教育、特に女子教育の必要性を痛感し、近代学校の設立や運営のために、厳皇貴妃の御所である慶善宮からの支援を惜しまなかった。その良い例が、明新女学校への創立支援であり、厳皇貴妃の弟の厳俊源が設立した進明学校(1906年設立)への支援や厳皇貴妃の親戚の厳柱益が設立した養正義塾(1905年設立)への支援である。厳皇貴妃から支援を受けた、この3校は、当時、ヤンバン学校と言われており、特に明新女学校は貴族学校と呼ばれていたと言う。

淵澤能恵は、明新女学校の創立にあたり、具体的にどのような貢献をしたかについては明らかになっていない。創立後は、学監として教育と教務及び学校の運営まで任されており、校長は生徒募集と学校全体の監督をしていたと言う。創立したばかりの学校を軌道に乗せるために、まさに二人三脚の協力体制で頑張っていたのではなかろうか。

淵澤能恵と李貞淑は、学校をどんどん発展させていき、1909年に校名を淑明高等女学校に改称し、韓国名門女学校「淑明学園」を築き上げた。淵澤能恵は、平素から最高の高等教育機関である女子大学まで創設したいという気持ちを持っていたようであるが、叶わず晩年には自身の亡き後の女子高等教育機関の創設を松本雅太郎に託して1936年2月、86歳を目前にして息を引き取った。

3. 淵澤能恵と淑明女子専門学校の創立

淑明女子高等学校の沿革によれば、「淑明女子専門学校創立準備委員会」は淵澤能恵の没年12月に発足したと言う。当初の設立計画では、淑明女子高等普通学校を拡張して1938年春に開学する計画であった。しかし、その後、朝鮮総督府と設立について交渉を行った結果、校舎を京城の郊外に新築することになり、設立計画の規模が当初の構想より膨らんでいったと言う。

それで新校舎の敷地は李王より下賜されることになったが、校舎建築費及び設備費などの経費で35万圓を要していた。この中の20万圓は淑明学園側から捻出することになったが、残りの15万圓については調達の目途が付いていなかったようで、1937年3月6日に開催された第1回淑明女子専門学校創立委員会でこの15万圓の調達方法について話し合

われた模様である。

この委員会では、それともその後の委員会では、定かでないが、朝鮮日報によれば、この年の春、朝鮮総督府に淑明女子専門学校設立のための寄附金の申請を行ったと言う。それから1年後の5月、朝鮮総督府から寄附許可の指令が下りたのである。

ところが、当時は日中戦争の真っ只中であって、戦争を後方支援していた朝鮮総督府は財政が逼迫していたにもかかわらず15万圓という大金を一私学建立のために寄附を許可したということは、にわかに理解しがたい、謎めいた話である。

ここで朝鮮総督府からの寄附金の謎解きを試みたい。

1つは、1919年から1927年までと1929年から1931年までの約10年にわたり、朝鮮総督を勤めた齋藤實とその夫人の春子、それに淵澤能恵という3人の人脈関係が大きく働いたのではないかと推察する。齋藤實は陸奥国水沢出身で淵澤能恵とは同郷の岩手県出身であるし、春子は、淵澤能恵が若い頃、在職していた東洋英和女学校に学んだことから師弟関係に近い尊敬の念を抱いていたのではなかろうか。このような関係から齋藤夫妻と淵澤能恵は交流をしており、その親しさが文通でよく表れている。

もう1つは、この3人は、3人とも当時としては大変珍しい、英語が堪能な国際人であり、リベラリストでもあった。またキリスト教信者か、もしくはキリスト教に理解を示している点でも共通している。

なお、齋藤實は、1919年、朝鮮総督に赴任してそれまでの武断政治から文化政治に施政を果敢に転換し、朝鮮人同化や懐柔政策の一環として内鮮融和を進めたことで知られている。1922年には、第二次朝鮮教育令を公布して朝鮮でも法的に大学設立を可能とし、2年後には京城帝国大学が設置されるなど、朝鮮における高等教育政策を前進させた総督でもある。この文化政治や内鮮融和および教育に対する前向きな姿勢も齋藤實と淵澤能恵は共通している。

淵澤能恵は1936年2月8日で天寿を全うするが、18日後、齋藤實は2・26事件で凶弾に倒れる。それから約1年後、春子夫人は「淑明女子専門学校創立委員会」の委員として表に登場するが、この登場は、教育における内鮮融和を長年にわたって誠心誠意実践し、女子高等教育機関の設立を念願していた淵澤能恵に対する、尊敬の気持ちと故人の遺志をついで実現させてあげたいという一種の使命感の表れではなかったのであろうか。

一私学の創立委員会が、篠田治策李王職長官を委員長とし、元総督夫人をはじめ、中樞院の参議や銀行の頭取、元総督府学務局長らが委員という布陣をしていた。このように植民地朝鮮の政・官・財・教育界から錚々たるメンバーたちが集められたのは、元朝鮮総督夫人の春子の呼びかけなくしては実現できるものとは考えにくい。齋藤春子自らが創立委員になって淑明女子専門学校の創立を全面的に支援したと考えるのが妥当ではなからうか。

淵澤能恵は、生前、自身の退職金1万圓と財産一切を淑明女子専門学校設立のために寄附をするとの遺言を残して亡くなった。3年後の1939年4月1日、淑明女子専門学校は、家政科(40名)、技藝科(40名)、専修科(50名)の3学科を有し、新入生130名で華々しく開学をした。

* 淑明女子専門学校創立委員会(1937年)

委員長 篠田治策

委員 林茂樹、丹羽清次郎、渡邊豊日子、柳楽達見、武者錬三、宇佐美勝夫、松山常次郎、松野瀧野、松本正寛、小林源六、有賀光豊、浅野太三郎、齋藤春子、城後信吉、関屋貞三郎、朴榮喆、張憲植、韓相龍、金漢奎、金性洙、関大植、

委員 幹事長 小田省吾

委員 幹事 野村盛之助、松本雅太郎、李起爽・金永煥(職員代表)、金縣實・李淑鍾(業主代表)